

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	ドイツ文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・ドイツ文学専攻・D3	山本 恵	印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学研究科ドイツ文学専攻・教授	前田 良三	印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名		
研究課題名	代名詞類処理という困難点克服から試みる日本人ドイツ語学習者のためのテキスト理解				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2011 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

日本人のためのより効果的なドイツ語学習・習得への貢献を目指す本研究概要は、次の3点に集約される。

- 1) ドイツ語学習・習得のためのテキスト理解プロセスの概観とドイツ語教育の現状および問題点の指摘
- 2) 日本人学習者の多くが（特に読解時）つまずきやすい文法事項のひとつとしての代名詞類処理に関する、ドイツ語と日本語における言語構造・処理方法の違いの観察・仮説構築
- 3) 2) から得られた仮説の検証として、学習者のつまずきを調査・結果の考察

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ドイツ語学習・習得] [日独語対照研究] [代名詞認知・処理]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、2011 年度立教 SFR の交付を受け、「ドイツ語テキスト内の代名詞類を和訳する際の法則性」に関する検証および考察に取り組んだ。研究概要は、日本人ドイツ語学習者のためのよりよい学習・習得方法の提案を目指し、次の 3 点に集約される：

- 1) ドイツ語学習・習得のためのテキスト理解プロセスの概観とドイツ語教育の現状および問題点の指摘
- 2) 日本人学習者の多くが（特に読解時）つまずきやすい文法事項のひとつとしての代名詞類処理に関する、ドイツ語と日本語における言語構造・処理方法の違いの観察・仮説構築
- 3) 2) から得られた仮説の検証として、学習者のつまずきを調査・結果の考察

日本人学習者がドイツ語テキストを読み、それを日本語へ置き換えようとする際、その理解を妨げやすい文法事項のひとつに代名詞類が存在することは、修士論文にて明らかとなっている。そしてその困難点が、他の「難しい」事項（前置詞の意味判断や形容詞の名詞化識別など）とは異なって学習者個々の学習歴または習熟度に関係なく全体に観察されることは、2009 年度の立教 SFR 交付を受けた研究によってまとめられた成果である。そこで今年度は、日本人ドイツ語学習者のつまずきやすい事項のひとつと推定されるドイツ語代名詞類、とりわけ人称代名詞に焦点を当て、学部学生へ独文和訳調査を実施し、実際につまずきの観察とそれが生じてしまう要因を分析することを試みた。したがって SFR の資金は、主にこの独文和訳調査に関して利用され、交付期間においては前述の 3 つの概要のなかでも 3 点目を中心に研究活動がなされた。

そもそも日本人学習者にとって人称代名詞の処理が難しいのは、英語だと he や she にあたる 3 人称の代名詞が、ドイツ語では文法上の性が一致すると人間以外も指示しうることが影響しているとまず予想される。多くの日本人学習者が最初に学ぶ外国語である英語と、学習者が日常用いている日本語にはないこの原則を、一定のまとまりやより複雑な文章を読みながら使いこなすことは容易ではない。ドイツ語教育の場において、しかし人称代名詞は初級レベルから導入されている事項である。その際、人称代名詞とその指示対象はつねに（配語上）近くで対応し合った、ごく基本的な原則を文単位で示すという説明が一般的だが、この説明のみでは実際の言語運用における機能的な側面を十分にカバーすることは不可能だろう。中級以降で扱う新聞や雑誌の記事、物語などのテキストでは、文章単位すなわちテキストレベルで照応関係を把握することが求められるため、このような学習・習得のステップアップを助ける説明を加える必要が指摘される。また、ドイツ語人称代名詞処理に日本語学習者がつまずく理由は、両言語の言語構造の違いに見出すことができると考えられる。本研究の一環として、ドイツ語文学作品と異なる訳者によるその翻訳版 11 種を、登場人物を表す名詞およびそれを指示する代名詞に該当する部分に注目して比較・対比させてみたが、日本語はドイツ語テキスト内の名詞を基本的に訳し（言語形式上明示する）、人称代名詞をときに訳さない（言語形式上明示しない）という反応のもとに処理を行っていることが明らかとなっている。ドイツ語は、文レベルでの「文法」を堅持し、主語や目的語を代名詞という形で明示するが、日本語は、「文脈」から何を指しているかがわかれば、それを代名詞のような形態に反映しなくてもよい。このような観察結果から、学習者がドイツ語テキスト理解時に、日本語をベースとした「普段の読み／訳し方」を切り替えることなく持ちこんでしまった際に困難が発生するという仮説を構築し、学部学生を対象に調査を実施して困難の発生するメカニズムやドイツ語に対する

研究成果の概要 つづき

日本語の反応についての実証的な記述を試みたのが今回の成果である。

調査にあたっては、これまでも行ってきた学習者による独文和訳分析の傾向をもとに任意でドイツ語テキストを選定・編集し、対象となる学部学生が1時間程度で和訳可能な質問紙を作成した。前期と後期の2度にわたって調査を行い、本学立教大学文学部文学科ドイツ文学専修2年次学生のべ84名の協力を得た。前期実施分・後期実施分ともに2部構成となっており、質問項目はテキスト内の人称代名詞の指示対象を問うものがほぼすべてを占めており、人称代名詞の指示対象がわかるように訳すよう注意書きを付して独文和訳の反応を回収後できるだけ的確な判断できる環境が整うよう配慮した。収集データは代名詞の和訳部分を4段階(0指示対象と異なる置き換え、1当該の代名詞未訳、2「彼・彼女」等での置き換え、3繰り返し等による明確な置き換え)に評価・分類し、クロス集計およびカイ2乗検定を利用して調査対象とした人称代名詞の各箇所とその評価に関して分析し、どの箇所の人称代名詞につまづきが集中しているのかを特定した。加えて、類似の和訳反応をしているサンプルごとにグループ分けが可能となるクラスター分析も行い、今回収集したサンプルを平均評価の高い順に3つのグループに分け、グループ間の差となる人称代名詞の箇所や、指示対象把握の困難が必ずしも評価の低いグループのみに集中しているのではないことを分析した。引き続き、サンプル元である学習者が、そのつまづきが集中されるとする箇所において実際どのように処理の困難をきたしているのかという観察結果は、学習者が指示対象特定の際にどのようなストラテジーに依存したかによって類別可能であった。そして代名詞処理のために学習者が行使するストラテジーは、「語順／配語」・「形態」・「意味」の3つであることが推定された。だがこの3つでは、文法的には指示対象となりえてしまう「候補」の存在を排除できない。この指示対象特定に立ちだかる壁を乗り越えるために、本研究では「トピック」という概念に注目しており、今回に関してもこれを把握することで処理の困難を克服する仮説を構築した。現段階では仮説の域を出ないものの、代名詞処理のストラテジーには、つまづきを誘発しやすい「語順／配語」を保留にし、「形態」・「意味」そして「トピックの把握」をより正確な代名詞処理のストラテジーとして仮定し、ここまでを今回の研究成果とする。

独文和訳のサンプル分析をとおして、テキスト読解力／処理力向上のために、代名詞処理に関して貢献しうるポイントは、形態を見逃さないこととともに、その代名詞が主文にあるのか、それとも副文にあるのかという文ないしテキスト構造への注意がとりわけ重要であると思われる。今回の観察においてつまづきが集中していた箇所も、形態は一致していても、主文と副文のトピックを同じレベルでとらえたために、語順／配語や文脈に依存することとなり、結果として「候補」を指示対象と特定してしまっているケースを確認した。ドイツ語の人称代名詞は、日本語には基本的にない体系で機能しており、またトピックの保持に使用される指示対象の代わりを果たすことを基本とする、本来は目立たない存在であるため、その輪郭を学習者がつかむのは容易ではないだろう。しかし、ストラテジーの存在やトピック推移を把握する技術が磨かれていくことによって、習熟度の高い学習者やネイティブが見ているだろうより立体的なテキスト構造の把握、ひいては適切な代名詞処理に近づくことも可能なはずである。今後も異なるテキストによる調査実施や、主文・副文間の分析を継続する。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今年度、本研究に関する研究発表としては、所属専攻論文集への寄稿および学会シンポジウムでの口頭発表を行った。

(①雑誌論文と、④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等) に該当。)

- 1 日本人ドイツ語学習者における代名詞処理
— テキスト読解の困難点を克服する手掛りとして
〔2011年度立教大学大学院提出博士論文〕
- 2 Die Wiedergabe der deutschen Pronomina im Japanischen bei der Übersetzung
— Priorität der Grammatik im Deutschen, Priorität des Kontextes im Japanischen
〔立教大学ドイツ文学専攻論文集《WORT》第33号 (2012) 1-19頁〕
- 3 ドイツ語テキスト読解における人称代名詞の日本語への置き換え
— 「ドイツ語は文法、日本語は文脈」?
〔日本独文学会 2011年度秋季研究発表会 (2011年10月15日金沢大学)〕
シンポジウムタイトル: 「入門文法」 — よく説明・理解できないこと — テキスト理解を助ける中・上級文法の試み
※ 2012年6月、シンポジウムをもとにした研究叢書が出版予定。(執筆中)